

令嬢誘拐



三宅 優・著

一風堂

令嬢誘拐

三宅

優

三宅 優（みやけ ゆう）

本名竹ノ内二三男。一九四八年生まれ。日本大学法学部法律学科卒。犯罪学及び犯罪精神医学の研究に専念。具体的犯罪事象に基づき、取材調査を行う反面、主に犯罪者の心理分析に力点をおき、犯行の推移を考察する。

令嬢誘拐

発行 一九九二年五月二十五日

著者 三宅 優

発行所 一 風 堂

東京都清瀬市旭が丘五丁目一―三―一〇三

電話（〇四二四）九二―〇八二〇 振替 東京四―七〇七二一九

印刷所 望月印刷株式会社

埼玉県大宮市桜木町四丁目四四四

電話（〇四八）六四一―六六五一（代）

定価 一、〇〇〇円（本体九七二円）

令嬢誘拐

三宅
優

はじめに

人間を描いてみたいと思った。書くのではなく、あくまで描くのである。

ある犯罪現場を想起する。そのひとつの小さな思念から、様々に派生してくる感情がある。それは欲望であり、衝動であり、又、冒険心でもある。犯罪という衝撃的な現象行為を凝視することによって、自分の心の中に燃え上がりつつある何かを観る思いがする。ひとつには、人間の本然たる情欲が、犯罪行為の中に包含されているためであろう。

犯罪を人間性への回復とする見方は、非常に危険ではあるが、ミステリアスな想念ではある。罪を犯した人はむろんの事、事件に巻き込まれた人々の悲痛な瞬間との出会い。それはいずれにしても、予期せぬ出来事との遭遇であつた。

人と事件との関連を、具体的事象の中で追う。事件に巻き込まれぬように。犯罪に陥らぬように。平穩な生活を営む人々に対して、このささやかな祈りが、筆者の胸中にある。この一書より、犯罪回避に関して、実用的な意図を組み取っていただければ、幸甚に存ずる。

令嬢誘拐／目次

令嬢誘拐（その一）	5
令嬢誘拐（その二）	67
石打ち源蔵	127
メツカ殺人事件	187

令嬢誘拐（その二）

「身代金^{みしろきん}」とは人身売買の代金、又は人質を返す代わりに要求する金のことをいう。

戦後の身代金目的誘拐犯の第一号として、犯罪史に名をとどめる守口俊夫^{もりぐちとしお}の犯行は、筆者にとつてどうしても解^げせない、謎の部分が一点ある。

J R「目白駅」。J Rとは、ジャパン・レイルウェイ・カンパニーの略称である。しかしそう呼ばれるようになったのは最近のことで、もとは国電又は国鉄と呼ばれていた。——国鉄「目白駅」といった方が、ピンとくる諸氏も多いのではないかとも思われる。

守口俊夫が「目白駅」のホームに降り立った当時も、まだ国鉄「目白駅」の時代であつた。

守口俊夫、二十一歳。やや猫背で、さほど背も高くない男。年齢の割には老けて見える。一見すると三十歳くらいにも見える。

守口は、目白通りを東に向かって歩いている。つまり、学習院の方向である。通りの向かい側には川村学園がある。学習院の土塁のような塀に沿って、さらに歩を重ねる。土塁の上には手入

れの行き届いた小枝が、整然と植えられている。その小枝の内側には、一メートルほどの高さの鉄条網が張られている。

守口俊夫は、その有刺鉄線を横目で見ながら、歩き続けている。やがて正門前へ。ここも通過。学習院高等部・中等部の門を過ぎた辺り、目白通りの向かい側に、目白警察署の建物が見える。

今、守口の胸中に去来するものは、有刺鉄線と道の向かいの警察である。この二つには二十一歳の守口にとって、にがい思い出が秘められている。

——というよりも。

今、こうして学習院の塀に沿い、そして目白警察署を横目でチラチラ見ながら歩いてる守口は内心、ビクビクなのである。実のところ守口は約一ヵ月前、八王子少年刑務所を脱走した身であつた。本来なら現在、刑務所内で身柄を拘束されているはずであつた。

守口俊夫は二年前、佐々木家令嬢慎子誘拐の罪状で、三年の実刑判決を受け、前記刑務所において受刑中であつた。あと一年の受刑期間を残したまま、守口は脱走した。

もっとも、この誘拐事件に関して守口に言わせれば「三日間連れ歩いただけ……」ということであつた。しかし守口の行動は、どうみても刑法第二二四条、又は改正刑法草案第二八三条の略取誘拐に該当する。しかし当時十九歳の守口にとっては、軽^レ遊^ニんだつもりだったようである。

この事件に関する警察のやり方が、守口にとっては反発を覚えるものであり、その犯行を素直に認めたくない心情を起こさせた原因だったともいわれている。

守口は少年刑務所を二年目に「脱走」した。

言葉の概念を少し正確に考えてみよう。脱走とは、ある拘束から抜け出し、逃げることをいう。これに対して脱獄とは、囚人が刑務所から逃げることをいう。守口の場合、厳密な言い方をするならば、脱獄であり、彼のことを「脱獄囚」というべきであろう。脱走の場合には、脱走兵などという使い方をするが、要するに刑務所から逃げ出すのであるから、脱走でも脱獄でも、意味上は同義とみてよい。

ここまでいうと守口俊夫という人物は、脱獄という強い言葉のためにいかにも暴力的で、脅迫的な犯罪者であるかのように思えてくる。しかしそれは、人間のイメージからくる錯覚である。事実、守口の犯罪行為には、決して粗暴で残忍な部分が見当たらないのである。（注・筆者は犯罪者のことを、単純なヒューマニズムで弁護しようとは思わない。ただ、犯罪を構成する事実関係に基づいて、当時者の真実な心の領域に、より深く、そして正確に踏み込んでみたいと思うだけである）

目白通りに架かる千登世橋を渡った。

さらに歩くと、不忍通りと分岐する地点に出る。目白駅を降りて今まで歩いた地域は豊島区、そしてここから先は文京区となる。

守口は歩く。右手に急な坂道がある。この坂を小布施坂という。明治時代、株式の仲買をしていた小布施新三の屋敷が、この辺り一帯にあった。坂は、その名から付けられた。坂道そのものは、江戸期の宝暦年間（一七六一年頃）に、野良道としてつくられたものである。

その道に面して、今では公園が整備されている。その公園の東側に隣接する建物が「豊明小学校」である。目白通りのハス向かいに日本女子大学がある。「豊明小学校」は、その付属小学校である。

三月初旬のことである。

守口俊夫は今、同小学校の正門付近に立っている。時刻は午後二時半を回っている。

良家の令嬢が、この学校に通っていることを、守口は以前から知っていた。

正門からは、続々と初等科の女兒たちが退出してくる。大抵は数人のグループにまとまっている。

（一番可愛い子は……）

守口は、そういう目算をもって門前に立っている。豊明小学校の正門前には、バスの停留所がある。このため、バスを待つふりをした守口が立たずんでも、少しも不自然さがなかった。

守口は八王子の少年刑務所に服役していた頃、いつもまだ見ぬ美貌の少女のことを思い浮かべていた。出所する自分を待っていてくれる者は、友人でも母親でもなかった。自分に忠実な少女だけが、守口にとって生き甲斐であり、心のささえであつた。十九歳の時に三日間連れ歩いた「慎子」は、守口にひどく従順で、可愛かつた。その当時の心の余韻が、豊明小学校の正門前に立つ守口の胸中にある。

守口は、正門から友と楽し気に会話しながら出てくる少女達に、眼を凝らしていた。守口のよしとする少女は、まだ見掛けない。守口が今しようとしている行為は、誘拐という犯罪である。

——この事件は、結果的には営利誘拐事件としての構成要件をもつに至つたが、少なくとも、小学校の門前で少女の退出を待つ姿は、営利目的というよりも、略取目的といった方が真実に近いであらう。

(きた。……あの子……)

守口の両足の親指の先に、ピリツと神経が反応した。スツと守口の体が移動した。

正門から四人の生徒が退出してくる。その中の一人、いちばん大柄で美貌の少女に守口は近づ

き、

「僕は警察の者です。お宅のお父さまから特別に頼まれて、あなたを保護することになりました。あなたは、ある人にねらわれています。僕があなたを保護しますから、秘密の場所まで送ります。そこでしばらく身をかくすように、お父さまがおっしゃっております」

と、少女に物静かに耳打ちした。このまことしやかな守口の口調に、少女の心は素直に応じた。守口には、少女の心に反発心を起こさせない、先天的な何かが備わっていたのかもしれない。

この少女が、篠山工業専務の次女、靖子（11）であった。靖子の靖とは、やすらかで、落ちついて物しずか、という意味が込められている。旧字体は「靖」。

靖子はその名の通り、落ちついて物しずかな雰囲気を漂わせた、美貌の少女であった。十一歳とは思えないほど背が高く、膚も透き通るほどに白かった。守口が、ひと目見て心惹かれたのも当然であった。

守口は靖子の手を引いて、不忍通りを東に進んだ。

「悪い人があなたを狙っていますから、電車には乗りません。歩きます」

守口のそういう言い方に、靖子は自分がこの人についていくことは義務かも知れない、と子供ながらに思った。始め靖子は守口のことを「警察のおにいさん」と言っていたが、会話が進むに

つれ、ただの「おにいさん」という言い方に変わった。守口には少女に、そうした不思議な親しみを感じさせる雰囲気があつたようである。

ここでひとつ、守口俊夫について思考してみよう。守口は今、二十一歳。二十一といえば、意識の盛んな年代である。普通ならば、成熟したセックスの相手を求める年代である。男性が女性に近付き、女性が男性に誘われるのは、いずれにしても性行為を望んでいるためであり、自然な精神活動の発現といえる。セックスという交渉を目的としないならば、わざわざ異性を探し求める必要もないのである。女性の身体の膨らみや温もりに、得体の知れぬ安らぎと美しさを感じ、揺れ動く肉体のすべてに、強い憧憬と執着心を抱く年代。

二十一歳。

しかし守口俊夫は違つていた。守口にとって異性としての興味の対象は「少女」なのである。昨今「連続少女誘拐殺人事件」なる大犯罪が発生したが、この場合には対象がすべて七歳くらいまでの幼女であつた。（この件については、他の機会に考えてみたい）

守口は、何故少女にのみ執着するのか。しかも経済的に裕福な家庭に育っている「令嬢」ばかりを誘拐の対象とするのだろうか。——それは当然なことだ、という読者諸氏の声が聞こえてく

る。貧乏人の娘を誘拐しても金にならない。金持ちの娘でなければ、高い身代金も要求できない。その通りである。しかしどうであらう、誘拐という犯罪の目的を身代金の要求のみに限定した場合には、その仮説は正当性をもつ。しかし仮に、身代金要求目的でないのに「令嬢」を誘拐するとするならば、なぜ令嬢でなければならぬのか、という疑問が湧いてくる。姿かたちや見映えのよい少女ならば、目を転ずれば身近にいるはずである。守口にとっては「令嬢」でなければならぬのである。話が重複するが、——この守口の犯行は、結果的には営利誘拐という起訴事実がさう訳であるが、少なくとも守口が、令嬢誘拐を企てた初期の目的（あるいは動機）は、営利ではなかったのではないだろうか、と思える節がある。——以下、この事件の推移を見守っていただきたい。

2

不忍通りを東へ東へと歩き続けた。靖子にとっては、乗り物にも乗らずにこんなに歩き続けることは、生まれて初めての体験だった。

護国寺、大塚三丁目、千石三丁目と歩くうちに、

「おにいさん、疲れた」

と、靖子は小声で言った。上品な靖子の顔に、疲れが広がっていた。守口は靖子の前に背を向けてかがんだ。

「おぶってあげましょう」

守口の言葉使いは、まだ丁寧なままだった。

守口の心の中に、

（この少女は、良家の令嬢だ）

という思いがあるためである。不思議なことに守口は、この事件を起こしている最中、ずっとこの気持ちを持続していた。靖子のことを呼び捨てにすることもなく、

「靖子さん」

とか

「あなた」

という言い方で話しかけていた。どうやら、これが「令嬢」に対する守口の本心であるらしい。守口におぶさった靖子は、やはり少女である。かすかな寝息を立てていた。靖子は正門付近で